

八月の濡れた砂

藤田敏八 日活 1971年

林久登 スタッフ

言わずと知れた藤田敏八の青春映画の金字塔だ。僕は20代の半ばごろ、この映画を観て体が震えるほどのショックを受けたことを、今も覚えている。それは日頃鬱屈しているもの、抑えていたものがバーンとはじけるような開放感だった。丁度その頃、僕は藤田敏八の弟慶二と海辺にある一軒家に居候をしていた。僕たちの日常はこの映画のようにドラマチックでもワルでもなかったが、2人の生活にダブルところが随所にあつた。早熟の慶二が健一郎（村野武範）でオクテの僕が清（広瀬昌助）僕は20代半ばの社会人、映画の彼らは10代の高校生だが、精神構造はそんなに変わらなかった。いわば僕たちは遅れて来た少年だった。ギラギラ照り付ける太陽の下、さんざめく人の群れ、潮騒の響き、女たちとの戯れ、スクリーン上で若者たちが躍動していた。日常のワクの外には何と面白い世界が広がっているのだろう。僕らは何をしているのだろう。何と無為な時間を過ごしているのだろう。もつと殻を破っていいのだ。そんな気分になせられた青春映画で、ストイックな少年（青年？）が、ワルになって行くきっかけとなった作品である。

